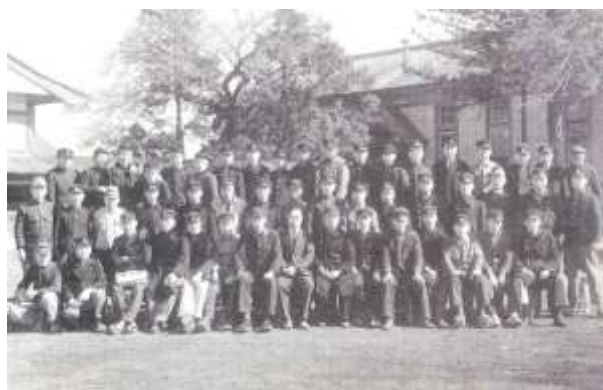


土浦中学生20～復員、土浦中学編入～

戦中から戦後に掛けて、旧制土浦中学校では疎開生徒や復員者・引き揚げ者の転入・転出が相次ぎました。今号では、満州鞍山中学から大分陸軍少年飛行兵学校に進み、復員後、土浦中学に編入、高1回生となった大貫和邦氏から、高21回松井泰寿・鴻巣茂が、2019(令和元)年5月21日に進修学習館で伺ったお話を紹介します。

文中の【 】内は筆者による注記です。



中48回5年3組 クラス写真

1列目の中央が担任の広瀬正雄先生

高井戸から鞍山へ

私は、1930(昭和5)年1月に生まれ、父市郎は、土浦中学を1918(大正7)年3月に卒業【中17回】すると、満鉄(注1)に就職しましたが、その後、帰国して警視庁に勤務していました。1940年、満州国鞍山市(注2)にあった昭和製鋼所に転職し、再び満州に渡るようになりました。私が小学5年になる時で、東京市立高井戸第二尋常小学校から鞍山の千歳小学校に転校となりました。父、母、姉、妹、姉、妹、姉、妹の6人で、東京から神戸までは東海道線を利用し、神戸港からは船で大連に渡り、大連から鞍山までは満鉄の列車で行きました。5月6日は掛かったと思います。女学校に在学中であった長姉満佐子は、卒業後に渡満し、同製鋼所に入社。その後、職場の同僚と結婚しました。

鞍山は、満鉄が開発した都市だけに、整然と区画された日本人だけの町と昔から住んでいる中国人の町とに分かれていました。満鉄によって、同社の附属地(注3)に設置された日本人子弟対象の学校は、千歳小学校を含めて、小学校だけでも5、6校はあったと思います。鞍山の気候は大陸性気候で、夏は30℃を超え、冬は氷点下20℃に達する時もあります。そのため、冬は家庭に氷を張らせ、体育時にはスケートをしました。住宅は煉瓦造り3階建てのアパートで、二重窓、水洗トイレの、暖房設備完備の立派なものでした。学校にも、冬には石炭を焚いて蒸気を通すチーム暖房が設置されていて、それほど寒いと感じたことはありません。1942年、鞍山中学校に入学しました。同校は、ラグビーの強豪校で、全国大会に何度も出場していました【1935年の第17回全国大会決勝戦、同校3対3台北一中、引き分けにより両校優勝。1941年第23回大会準決勝、同校3対5台北一中、決勝は台北一中5対0福岡中】。そのため、始業前にはラグビーをさせられ、また【冬には、同校でもグラウンドがスケートリンクになった】。放課後の私は、バレーボール

に夢中でした。実業団の昭和製鋼所チームの選手たちと一緒に練習する機会が、屢々あったからです。同チームは、1940年の日本選手権で優勝し、「全日本」のタイトルを初めて海外へ持ち出していました。チームの中心選手で、全日本チームのメンバーでもある佐藤賢吉選手も、教えに来てくれました。同選手は、当時としては画期的であった移動攻撃を編み出した選手で、そのプレーはまさに神業でした。姉文子は、鞍山高等女学校で校旗の旗手として、全校生徒の先頭いつも立っていました。そのため、先輩たちは何とか姉に取り次いでもらおうと、私に優しくしてくれました。しかし、姉にはそのことを一言も話していません。素敵な姉でしたが、私が大分の少年飛行兵学校に在学中に病気で亡くなりました。死にも目にも会えないばかりか、お葬式にも出られませんでした。

大分陸軍少年飛行兵学校入学、敗戦

1944年4月、鞍山中学2年修了で、東京陸軍少年飛行兵学校大分教育隊に入学しました。とにかく飛行機に乗りたかったのです。しかし、飛行機乗りは死を覚悟しなければなりません。両親は、長男の私の我が儘をよく許してくれたと思います。

同隊は、1943年10月に現在の大分市王子新町に設置され、翌年5月に大分陸軍少年飛行兵学校に昇格しました。生徒定員2000人で、本土決戦に向けての特攻要員としての教育と訓練とが徹底して行われていました。1945年8月15日には野外演習に出ているので、終戦の詔勅を聴くことはできませんでした。演習を終えて学校に戻ると、上官から敗戦を告げられ、切符【国鉄・私鉄を問わず、自由に乗車できる乗車許可証のようなもの】を渡され、即時解散・復員を命じられました。班員全員が、呆気に取られ、悔し涙を流す間も無く、それぞれの故郷に向かいました。私は、満州に帰ることもできず、途方に暮れていると、同期の友人が、「佐渡島へ一緒に来い」と誘って

くれました。日豊線、山陰線、北陸線と乗り継いで新潟まで来ましたが、沿線の都市は、殆どが空襲を受けていました。それでも、鉄道は何とか動いていました。佐渡では、友人の実家の旅館の手伝いをしながら、ぶらぶらしていました。暫く厄介になりましたが、母の実家のある真壁郡大和村【現桜川市】へ帰ることに決め、船で新潟へ渡り、そこから上越線の高崎へ、高崎から両毛線で小山へ、小山からは水戸線で岩瀬へ、とやって来ました。母の実家で1ヶ月ほど暮らして、父の実家のある土浦にきました。年の瀬も迫っていたと思います。西真鍋の実家には祖母のくらが、1人で暮らしていましたが【祖父大助は日露戦争で戦死した】。祖母は、私の姿を見て、驚くばかりで、暫く口も利きませんでした。

家族の安否は全く分からず、祖母との2人暮らしが始まりました。祖母の遺産年金だけでは暮らしていけないので、深谷製作所の職工として働き始めました。変圧器を製造していたと思います。しかし、戦後のインフレが激しく、どうにもならなくなったので、家にあった古着を売ることにしました。東京の方が高く売れるだろうと考え、配給制であった切符をやっと手に入れて、翌日には売りに行こうとしていた日に、父・母・弟・妹と、満州で生まれ2歳になったばかりの聡子(としこ)の5人が無事に帰って来ました【姉満佐子は、夫の実家がある大分へ行った】。父は、シベリア抑留を危機一髪のところまで逃れて、帰国できたそうです。1946年8月でした。

土浦中学排球(バレーボール)部創設

帰国後、土浦市役所に勤務することになった父は、「土浦中学へ行け」と言いました。父は、知り合いの沼田謙三郎先生【中16回・社会科】に相談に行き、同先生から、在籍証明さえあれば、転入が可能であることを教えてもらいました。そこで、私が、鞍山中学の在籍証明を貰おうと、外務省へ手紙を出すと、少年飛行兵学

校の在籍も加えたのか、「鞍山中学4年修了」の証明書を出してくれました。

1947年4月、土浦中学5年【中48回】に入が認められました。5年3組、担任は英語科の広瀬正雄先生【中25回】でした。

前年後半には、土浦中学も落ち着いてきて、部活動も復活し始めていたようです。私は、転入が許可されると、早速、バレーボールを始めたい同級の小野茂君たちと部員集めに奔走し、30数名を集め、創部に漕ぎ着きました。この頃の様子を小野君は、1996(平成8)年に発刊した、創部50周年記念誌『桜水』に次のように記しています。

「排球部を創ろうという機運が芽生えたのは、昭和21年の後半であった。体育の授業に排球を取り入れ、人集めに熱い思いを滾らせていたのは、故岡田良典先生【中33回】であった。先生は、それこそ毎日、チームの練習に立ち合い、指導してくださったのである。学徒動員先の第一海軍航空廠から帰ってきた私共の進路を誤りなく指導する、その為には、『強靱なる精神』を創り上げねば、と考えられ、家庭も、校務の一部も、お友達との付き合いも投げ棄てて、一途に全力を投入されたのである。このことは、先生の同期の竹中一郎氏から聞かされ、初めて、先生の教育へのこよなき情熱と生徒への愛情を知り、私共は発憤、一層練習に励むこととなり、徐々に力を付け、やがて栄光を掴むこととなる。」と。

ハンドボールの全日本メンバーにも選ばれたこともある入江信太郎先生【中35回】や宮本西嗣先生【中40回。土浦二高に勤務しておられた。】も、ハンドボール部への指導の傍ら、私たちにも助言や激励してくれました。まだ9人制の時代で、コートもグラウンドに設けられていました【福岡国体のコートもグラウンドにあった。】。現在の鉄棒付近にありましたので、野球部のボールがよく飛んできて、野球部の連中から「ボール取ってくれ！」と怒鳴られたものです。ボールも僅か3個、何もかも不

足していましたが、バレーでできる喜びで、何の不自由も感じません。私が鞍山中学で佐藤選手から教わったバレーを紹介し、みんなで研究もしていました。

県制覇、そして福岡国体へ

1948年3月5日、中学48回生の卒業式が挙行され、バレー部結成初年度の幾多の苦難をともにしてきた飯村宗男・大川春郎・田部井登美弥・内野勇・小野茂など、土浦一高に進まなかった同級生は、真鍋台の校舎を後にしました。

同年4月、新制土浦一高が発足しました。48回卒業生で、一高への進学を希望する者には、3年への編入が認められました。私は、バレーを続けたい一心で、一高に入りました。新学期が始まると、県制覇をモットーに、本格的な練習を始めました。市川家正主将を中心に、毎日、日が暮れるまで猛練習を続けました。そして、県制覇の最初のチャンスである春の高校選手権に臨みました。が、準決勝で、宿敵水戸商業にまたも苦杯を嘗めました。この悔しさを晴らすべく、夏休み返上で練習に明け暮れました。

9月5日の県民大会の決勝戦で、三度【みたび】、水商と対峙しました。何としても雪辱を、との気合いが空回りしたのか、凡ミスが続き1セット目を失ってしまいました。それでも、私たちの士気は衰えず、ハンドボール部その他多数の応援を得て、勇気百倍、2・3セット目を連取して、宿敵を破り、県制覇と国体出場との栄誉を得ることができました。

第3回福岡国体のバレーボール競技は、福岡市と久留米市とで開催されました

【10/30〜11/3】。岡田先生が、同級生の方々に声を掛けて、遠征費を何とか工面してくれました。

10月18日の朝礼の際に、バレーボール部への壮行会が行われ、全校生徒の応援を受けて、私たちは決意を新たにしました。27日だったと思いますが、各自、米を持参して、土浦駅を出発し、東京駅12時発の国体専用列車に乗り込みました。引

率は岡田先生。ハンドボール競技の役員であった入江先生も一緒でした。列車には、東日本各県のチームが同乗していました【茨城県一般男子チームは、オール日立だった。】。国体専用列車でしたので、座席は確保できましたが、24時間も列車に乗り続けるのは、大変でした。3年前に大分から復員した時には、何の希望も無く、これからどうなるのか、と暗澹たる想いで乗車でしたが、今回は、バレーボール仲間との語らいに、時が経つのを忘れるほどでした。福岡国体では、2回戦で三重県神戸商に敗れましたが、他県の名選手の手を学びました。その結果、県総合選手権では、準決勝で日立製作所多賀工場チームには敗れましたが、県南選手権では、日体大を破り、県南に覇を唱えることができました。

こうした結果を残せたのは、岡田先生の病軀を押しての指導と激励、藤澤留夫先生【中38回。土浦二高に勤務しておられた。】、入江先生・宮本先生の助言、大川・小野両君の励ましに加えて、部員一同の努力があったからだ、と思います。今、思えば、バレーボールに明け暮れた土中・一高生活でしたが、何物にも代え難い、幸せな2年間でした。

1949年3月5日の卒業式、今度は、土浦一高の卒業証書を頂きました。卒業後は、代用教員として、山ノ荘村立山ノ荘中学校(現土浦市立新治学園義務教育学校)に1年間勤めました。バレーボールを教えられるということで、重宝がられたようです。翌年4月、日本専売公社【現JIT】に就職し、東京勤務となりました。会社でもバレーボールを続けていましたが、卒業と同時に、一高のOBで「桜水クラブ」を結成し、茨城県選手権の一般の部にも出場していました。1951年には高2・3回のメンバーを加えてチーム力が上がり、県選手権で日立製作所を破って、全日本9人制バレーボール総合選手権大会【1927年から開催されている9人制バレーボールの日本選手

権大会】に出場することができました。大会では、後にミュンヘンオリンピック男子バレーボール優勝監督となった松平康隆選手がいた日本鋼管に、こてんぱんにやられました。今では良い思い出になっています。

(注) 満鉄

満鉄南満州鉄道株式会社は、日露戦争で日本が獲得した東清鉄道の一部(長春から旅順まで)と付属利権の経営のため、1906年(明治39)年6月に設立された半官半民の国策会社で、初代総裁は後藤新平。同年8月、鉄道の他に、撫順炭鉱・鞍山製鉄所を中心に、交通、鉱工業、商業、拓殖などの経営を政府から任されることになり、日本軍による満州経営の中核となっていた。特に、1931(昭和6)年に発生した満州事変以降は、全満州に勢力を伸張し、一大コンツェルンを形成した。鉄道部門は、その翌年の満州国成立に伴い、同国有とされ、満鉄が委託経営をした。1937年に重工業部門を満州重工業開発に移譲したが、1945年、敗戦により全資産を接収された。

(注2) 鞍山市

遼東半島の付け根にある都市で、古くから、鉄の産出地として知られている。現在でも、中国最大の製鉄所があり、「鋼都(鉄の都)」の異名を有している。(1905年の日露戦争の後、満鉄が、鞍山付近で鉄の大鉱脈を発見し、撫順の石炭と鞍山の鉄とを利用して製鉄を意図して、1918年に鉄道付属地内に鞍山製鉄所を設立した。満州国時代の1933年に「昭和製鋼所」と改称され、八幡製鉄所に次ぐ生産量を誇っていた。)

(注3) 満鉄附屬地

20世紀前半の満州に存在した南満州鉄道の所有地。所有権のみならず、行政権をも行使した。日本は、1905年のポーツマス条約の規定により、ロシア帝国が経営する東清鉄道の南満州支線を継承した時に、鉄道附屬地(行政権や治外法権をもつ)鉄道会社の所有地)制度もそのまま受け継いだ。満鉄が同社の附屬地内で行った行政活動は、学校、病院、公園、職安、消防、宿泊施設の運営など多岐に亘っていた。